今日は、新型コロナウイルスについて、道徳の視点から皆さんにお話ししたいことがあります。
新型コロナウイルスの流行は、私たちの生活に「病気」という形で入り込み、いろいろなところに影響を与えてきました。
しかし、新型コロナウイルスの恐ろしさは、それだけではありませんでした。自分たちの生活がおびやかされてしまうという「不安」や、やりたいことができなくなってしまうという「苛立ち」。新型コロナウイルスは、このように、私たちの「心」にも入り込み、影響を与えてきたのです。
ニュースやインターネットからも、たくさんの事例が見つかります。都市部から引っ越してきた人に、もともとその土地に住んでいた人たちが、冷たい言葉を投げかけるというケースがありました。コロナのために戦っている看護師のお子さんが、いじめにあうというケースもありました。マスクを買い占めてしまう人もいました。
確かに、自分がコロナにかかりたくないという想いは誰もがもっています。自分の安全を第一に考える。それは、誰にとっても当たり前のことのはずです。しかし、先ほど挙げたような行動は、本当に正しいことだったのでしょうか。
少し話は変わりますが、コロナ以外でも、現在の社会は「予測不可能な社会」であると言われます。皆さんが大人になるとき、今ある仕事のうちの６０%は存在しないと言われています。授業でも、例えば三年生の道徳では、「歩きスマホ」にかかわるお話が、教科書に載るほどになりました。これは、１０年前を振り返ってみると、想像すらできなかったことです。
こうして見ても、どのような変化が起きていくのかわからない社会。新型コロナウイルスの流行は、その象徴的な出来事の一つだったということができます。予測ができないということは、誰も正解がわからないということです。誰もわからないから、周りの大人や先輩に、教えてもらうこともできない。このような状況だからこそ、私たちは自分で考えなくてはいけません。

何が正しいことなのか。どんな言葉かけや、行動をするべきなのか。
本当に大切にしなければならないものは何なのか。
一緒に考えましょう。先生たちも、一緒に考えていきます。
近々、道徳の時間で、担任の先生が「新型コロナウイルス」にかかわる授業をして下さると思います。ぜひ、担任の先生と一緒に、今日お話ししたことについて考えてみて下さい。